

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | ギイディングスの歴史学説 ( 中 )  |
| Sub Title        |   |
| Author           | 野村, 兼太郎   |
| Publisher        | 慶應義塾理財学会  |
| Publication year | 1921  |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.4 (1921. 4) ,p.598(130)- 568(140)  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 雑録  |
| Genre            | Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210401-0130">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210401-0130</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

終つてしまつた。

七

既に述べたやうにトンチン法は本來多くの缺點を有するものである。これは到底何人も否定することは出来ない。しかしながらこのトンチン法が保険思想の普及に與つて力があつたこともまた決して看過することは出来ない。トンチン法はトンチ自身の獨創であるといふことは出来ぬけれども、彼はかゝる計畫を實際に利用したる第一人であるといふことは認めなくてはならぬ。トンチン法の影響は單に佛蘭西一國に止らないで、各國に汎く及んでゐる。さうしてその普及に伴ふ弊害は勿論多くあるけれどもまたこの法は眞の生命保険の發達する萌芽を藏してゐたのである。即ちトンチン法は國體の原則に基づき、またある生命に關する。プロバビリテイの計算を行つたものである。トンチン制度は現在

様である。従つて吾人は細節に觸れずに概観しなければならぬ。

Nile 河の三角洲及び其の沿岸、Persian 灣頭及び Euphrates 沿岸に人口が密集した。是等の人口は一の密接せる種族のみではない。Alien は土人と混合して、種々な言葉が聞かれた。農業は系統的となり、産業は特種化された。驚くべき技術を有つた美術家が青銅で有用品を作り、金銀寶石を以て美しい模様の色どつた。技師は堤や貯水池や運河を作つて、河の氾濫を調節した。天才の建築家が偉人の爲に宮殿を、神と民衆との爲に寺院を、尊敬すべき故人の爲めに墓を作つた。舟が河を往復した。町であつた所も今や人間生活の混沌たる都市となつた。商人が沙漠を横切つて外國と隊商に依つて貨物の輸出を企てた。奴隸は茅屋に育ち、石山や煉瓦製造所に働いて死ぬ。書吏が月日や租税を録して王

行はれてゐる死亡率の實驗的法則の試をしたものに過ぎぬものである。只彼等が得たる經驗は絶大なる價值を有する後世の死亡統計を作製することに力をつくした迄である。

附記。この一節は A. F. Jack, An Introduction to the History of Life Assurance, Chapter XVII Holzschuber, Obrecht, And Tonkin より主なる材料を得、それに B. J. Hendrick, The Story of Life Insurance, Chapter IV The Great Tonkin Gamble 等により多少書き加へて成つたものである。

(大正十年三月九日稿了)

ギイディングスの

歴史學說(中)

野村兼太郎

四

歴史は歴史以前に比較すれば、短くて複雑多

朝の記録を保つ。是等東南 Mediterranean 地方の河畔に住める稍々進化せる人々が文明を作つてゆく。植民、流罪者、及び商人が是を遠き東方に擴め、商人と軍隊とが西部邊疆に及ぼした。

Crete の島々に於て Knossos はすでに古く確乎として Aegean 海を支配した。其の下は崩壊物の地層であつて、それは石器時代新部の燬物師や初期、中期、後期の Minoans に依て殘されたものである。其の周圍にはそれが支配するそれより小さな、然し富める町々がある。Aegean 島には多くの小港があり、Greece の海岸には植民地がある。即ち Argos 灣頭の Tiryns 及び Tiryns から Corinth に至る山路に當る Mycenae 等である。此の海上の勢力の驚くべき富、其の青銅や金は完全なる美術品や Egypt, Asia 及び西部 Africa と Europe との海岸の貿易に費された。其の商船は航行の際、又は港々でも戦争

船——最初の海上勢力——に依つて保護された。此の中央東部地中海地方の光輝ある文明に對して Egypt と Asia の軍隊は何等侵すところなかつた。

黒海と地中海との間、Taurus 山と Caucasus 山との間、Zagros 山と Caspian 海との間に Cappadocia と Armenia、及び Media と Elam の臺地が東方 Persia、更に遠くまで擴がつて居る。Egypt と Tigris-Euphrates 流域の軍隊が隊商の路を辿り、水路を上り、峡谷山路を経て侵入して來た。Elam と Media から、今や Persia から Aryan 民族が出て來て其の帝國を迅速に擴張した。Cappadocia と東部小亞細亞を通じて非 Aryan 民族が軍隊の勢力として現れた。Persian は Euphratic に勝り、Hittite は Egyptian 帝國の領土の一部を征服して、各自一部傳來の一部獨創の文明を樹立した。西部亞細亞高地の是等

の文明は強固な偏したものであるが、擴つて居た。Persia は西北印度に於ける Aryan の勢力を驅逐した。Hittite の勢力は西部の Aryans と Sumerian と Semitic の影響を與へた。

Aegean 海及び Adriatic 海を圍む三つの半島が地中海の北部に突出して居る。即ち小亞細亞 Peloponnesian と Greece、及び Italy である。是等の東北、北、北西は Aryan の分散した地方である。山や岳が谷や平原を圍んで海に面して居る。低い坂には橄欖や葡萄が、高い部分には粟や樺が生じ、海岸は不規則で、入江や灣があつたり、長い一直線の區域もある。希臘と小亞細亞との間で海上に Aegean 島が見える。海は (Agamemnon 以來) 印象派的な紫である。丘でも平原でも日中太陽は白色を呈す、然し朝夕の光莖は色である。美は此の時特に發揮される。孤獨と海とを恐れない人々も美には感じ易く、

自由を愛する。牧人、百姓、漁夫、水夫及び今は技術家や商人も加はる。河谷地方の人々に比較すれば、彼等は人口も少く、貧乏である。彼等の都市は Troy を除いて餘り榮へて居ない。其の建物も Thebes と Babylon に較べると遙かに貧弱ではあるが、知的である。其の彫刻や繪畫も型や線を驅使し得る自由に依つて眞實に到達したものである。種族として彼等は原始的の Mediterraneans, Danubean 侵入者と Alpines との混血であるが、奴隷は雜種に限られ、貴族的な Sparta に於けるより民主的な Athens に於けるやうな状態であつた(らしい)。彼等の軍隊は少數で地方的であるが、勇敢であつた。Athens の海軍は驚くべき勢力である。東部は European Greece の侵入に失敗した。又 Carthage は Italy に侵入したが、驅逐された。是等は北地中海地方の半島文明の著しい特徴である。Athens は是

を帝國的に作らんとして不成功に終つた。Macedon は成功したが其の帝國は短命だつた。Rome は Rhine と Danube 兩河の南部歐羅巴、東北亞弗利加、及び小亞細亞に亘る帝國を建設した。それは字義以上の意義に於いて「建設」したのである。動員の爲め、交通の爲めに用意された立派な道路は以前のものと等しくはない。あゝちは橋や水道に應用され、其の爲めに町の住民は淨水を多量に供給された。此の帝國は約五百年持續した。

羅馬及び其の領土の羅馬化された住民 Mediterraneans, Danubeans 及び Alpines の雜種は European Nordics 特に Baltics に蹂躪された。彼等の多くは森林の内地人であつた。彼等は建築に木材を使用し石を用ひない。工學や美術に關する知識は全く欠如して居た。侵入者として彼等は燒失したり破壊したりした。君主制度を

樹立して現存せる奴隸制度を改造し、更に擴張し義務的奉仕を増加した。舊制度の美術家の援助教導に依り、傳統と技術を模倣して嚴然たる城を建設した。羅馬化された基督教に改宗し、教會や僧院を建てた。教會や城廓の周圍に職人勞働者の町を生じたが、商人は少く、輸入品も殆ど知られてなかつた。普通の貿易は破壊されてしまつた。東方との接觸は唯羅馬からの傳導と Jerusalem への巡拜とだけであつた。それにも拘らず宗教部内や職人の組合内には羅典文明の遺物が残存し幾分か當時の風習を改善した。斯して内地西部歐羅巴の孤獨的文明、Mediterranean の遺物に對する野蠻の奇怪な反動が起つた。而して Saracen の侵入に驚かされ、Charles Martel の下に集り Charlemagne の出づる迄、政的には聯絡なく、知的には無意味であつた。Mediterranean が Baltic に復活し、北方の剛勇

と南方の知略とが相混和した時に、こゝにゴシック美術の類なき美を現出した。

暫く此の特獨の文化を生じた移住に就いて見れば、文字通りではないが其の關係者はすべて内地人である。彼等のほんの一部が嫌はしい暗鬱な西北海岸に住める漁夫や水夫であつた。彼等は船や筏を作つた。彼等は旅行好きではあつたが、Denmark より西方であつた。騒がしき北海又は Iceland や Britain の海岸に航海した。遂には Britain を征服し占有した。Gaul 海岸に航海した Norsemen は Normans となり、不完全に英化された Britain を征服した。地中海に於いても船乘を業とする傳統が續いた。伊太利、南佛蘭西、西班牙の港にも水夫の種は盡きなかつた。東方と西方との交通は次第に回復した。Egyptians, Cretans, Greeks 及び Romans の有つて居た地理、數學、航海術等の知識が発見され、

西方の船乘に傳播された。東方との通商は不定であるが、其の航路は變更され可能性は増加した。かの十字軍は異教徒から Jerusalem を取つたが、これを維持することは出來ず、東方に突入することは失敗した。然し大洋航路が発見されて航海は長くなり大膽になつた。Canaries や Azores を後にして希望峰を廻つた。Dutch と English, French, Portuguese と Spaniards が海國民となり、發見者となつた。大西洋は伊太利人に依つて横斷され、西班牙王國の勢力金力に扶持された。太平洋は西部から發見され、地球は周航された。歐羅巴は西半球を探見し植民した。大洋國民は大洋商業に依つて世界の文明を樹立した。

五

歴史と云ふ劇に於ける登場人物は單なる個人ではない。個人の集團、多人數である。是等は

單位として動作をなし、又特徴として彼等は道德及び知的結合を有つ。

更に又歴史は一つの場面が種々なる場所に於いて多少の變化と共に行はれ、全體の動作は常に繰返される。第二幕(中世史)は第一幕(古代史)の多少を變化を伴ふ繰返である。第三幕(近世史)も亦多少の變化を伴ふ第二幕の繰返である。是は「歴史は繰返す。」と云ふ諺の事實の根據である。

Memphis に於いて僧侶の集團が崇嚴に行列をやつた。彼等は神秘の主、天眼通たることを揚言した。過去の知識に教へられ、將來を予言した。彼等は如何なる徵候が豊作や饑饉を示すか又人間の如何なる行爲が生命の源泉や流を腐敗し、何が清くするかを知つて居た。今や彼等は人々が危機に瀕せることを注意した。南部の水夫等が口から口へと傳へ大危難の風評を流布し

た。河畔の住人は危異なる儀式を行つた。彼等は聖所を汚し聖獸を殺した。警告は増加した。澤山の山羊が死んだ。死んだ鱔が浮んだ。河自身も異常に險惡の觀を呈し、多くの人が是を見た。恐らく谷も三角洲も呪はれたやうだ。流行病や更に恐るべき疫病が明日にも街を襲ふだらう。

人々は行動を要求した。王は屢々夢を見て印象されて居た。兵士は集合し動員された。防禦的攻撃的の遠征が始まつた。土地は清められなければならない。

争が争鬭となり、争鬭が戦争となる。

埃及帝國に於いて僧侶は以前の如く幸福でなかつた。軍隊は傲慢になつた。人民は倦まず軍隊を歓迎した。折々には王が僧侶の代りに軍隊を敬するにさへ至つた。

是が一變形であり、恐らく第二である場面は無數の Semites が襲來して來た。Ct は彼等のものとなり、Eridu 陥ち、Nippur も又 Babylon も。

今や吾人は斯の如き叙述をやめて、此の點に就いて簡單に行動を約説しやう。

二つの運動が互に惹起し共に助長する。一つは領土と生活との爲めの集團争鬭であり、他は優越と收入との爲めの階級争鬭である。此の二つの運動が歴史を始める。是等が歴史の行動である。

天候に依る恐慌、源泉の枯渴、收穫遞減、其の他不時の困迫が人類の衝突となる移民の原因である。是は生死の問題である。團體は防禦の爲めに結合し、征服に依つて合併する。彼等は次第に混合し、積加する。

軍隊の指導者は戦争に依つて發展し、戦争が繼續し繰返され、ば有力なる政治家となる。軍

Summer に始まつた。

土耳其からの隊商が不穩の狀況を齎した。以前に嘗つてなかつた沃地<sup>オアシス</sup>が荒れたり井泉が涸れたりした。西アラビヤの山の谷々でさへ收穫は失敗し、數多の家畜が死んだ。Semites の種族が東方に移つた。武装せる異人の仲間、先驅者が Shinar の平原に居たが見えなくなつた。彼等は沙漠から來たと思はれた。老ひたる駱駝使は Semitic の遊牧の民が Mesopotamia 時代に牧畜して居たことを思出し、ある者は「いつもだ」と云ひ、他の者は是を否定し、すべての Semites は沃地の民であり、少くとも峡谷の民であると主張した。何れにしても未だ彼等は全く無害であつたが、如何に多數やつて來るか、又それが何を惹起するか誰も知らなかつた。

西方の空に塵埃の柱が起るのは隊商のそれではなかつた。警告はすでに遅れた。後から後か

隊士官は僧侶階級の如き「階級意識」を有し一階級を形成する。彼等は僧侶の優越と争ふ。争鬭は長く且つ烈しい。僧侶階級は嫉妬を感じ驚かされる。軍隊は攻撃的である。軍隊は分割すべき戦利品や土地を有つて居るが、超自然的許可を確保することは出來ない。之に加ふるに新しいものであるから尊敬の念を欠く。僧侶階級は傳統と形式とを有つ。見えない力で物事を善にし悪にもする。それが尊敬を興へ、保持させる。僧侶と兵士とが争鬭に疲れた時王權が一致し法令を布いた。優秀なる僧侶には新しい特權が興へられた。彼等は土地と收入を受けた。優秀なる軍人は神聖なる指導者として保證され、それ以來集會に招待される。そこで(歴史的に)「世俗的貴族」と「靈的貴族」とを生じ、何れも地主となる。

昔の土地所有者種族及び個人の土地所有者は

幸運ならば自由小作人となる。是等の人々は又商人となる。従者の古い共同團體は尙ほ奴隷である。職人は幸運ならば自由小作人となり、組合の特権を享樂する。若しも商人が榮へるならば彼等は(軍人のなしたやうに)階級意識となり、こゝに商人と地主との新階級争闘が惹起される。

Egypt と Sumer の歴史の初期から Justinian の御代に至る迄、團體的集積は常に繼續し、階級争闘は次ぎの階級に依つて吸収される。地中海諸島に於いても、東南の河畔地方、西部亞細亞高地、北地中海半島に於けるが如く會族が王國となり、王國が帝國となつた。僧侶が軍人に屈服し、「紳士協約」を發明して地主となつた。商人は富を集積して戦はんと用意した。

こゝに斷絶がある。帝國は瓦解する。そして戯曲の第一幕は終る。古代史が終つて、中世史が始まる。集團及び階級争闘の循環が新に起

彼等の内最も有能なる Normandy の William は Lanfranc の知的及び宗教的援助を以つて英國の混亂中から最初の政治的君主の西方國民を作上げた。封建社會と王國との關係を改造して王國を争ふべからざる地位に高めた。彼の無能力な後繼者の下で貴族等が勢力を得て社會を無政府のやうにした Henry 二世は兵役免除税、軍隊の法令を制定し、それに依つて王の收入を作り軍隊を貴族の恩恵から半ば獨立させ、且つ教會法院を一般裁判所に從屬せしめて、王國を個人的支配から國民の爲めの <sup>トラスターシップ</sup> 受託に高めた。そこで集團と集團との間、若しくは階級と階級との間の争闘のやうな烈しい著しい争闘が始まつた。

即ち完全なる集團——國民——と優越なる階級との争闘である。最初の衝突は不幸であつた。何故なら貴族連が再び勝利を得て、社會は分裂

る。

新しい宗教、新しい僧侶階級が起つた。三三七年 Constantine が死んでからその神的權威は讓步された。七四二年に Charlemagne が生れた時その社會的優越は完全且つ疑ひなかつた。然し Moors の北方侵入及び其の撃退は其の名聲の爲めに戦はざるを得ざらした變化を生じた。而して新しい軍國主義が Charlemagne 及び其繼承者の下に異常に發達した。知らず識らず寺院は聖地を回々教から清淨にすると云ふ要求に依つて是を助けて居た。十字軍に加れる男爵は有名無實の公爵より有力であり、且つ彼等の追従者は軍隊となつた。彼等は主教と妥協した神聖羅馬帝國と羅馬の主教達とは何れも「尊嚴」を擁護したが、最後に避け難い取引を締結した。新しい有力な地主階級が創られた。教主と男爵とは「貴族」となる。

したから。集團と階級争闘は最初に歸つて、中世史が終る。

Mediterranean 基督教は共產主義に傾く貧しき人々の内に生れ、彼等が社會的支配の機能として其の洪大な可能性を見た時偉人に依つて適用された。更に注意深く西北部の基督教さなくば新教を研究すると、是等が貧しき人々の幻想や希望とするよりも寧ろ貧しくはあるが自尊せる人々の人格的獨立の確證であることが確められる。故に神學の本質に於いて此の個人的良心の宗教は新しいものではないが、權威に對する反抗として分派であり、生活に對する反動として新しい信仰であるから生存競争の新しい實在に依つて發生した。十四世紀の「哀れな Richard」 William Langland、頑固な Wyclif 及び烈しい Huss 等は各自の違つた途に於いて此の精神の眞の代表者である。而して Constance 及び Basle

に於ける所業に拘らず、是が此の僧侶（ヒストリイ）が僧侶階級にならない理由である。

それにも拘らず此の精神、此の新信仰と僧侶とを以つて近世史は——十四世紀に始まる。古代及び中世史の集團及び階級争闘が繰返されるが又多少變化を伴ふ。百年戦争に依つて展開された新軍國主義は火薬を使用する。新地主主義（ランドローディーズ）は中世的奉仕に代るに貨幣的賃料を以つて保たれる。此の當時階級争闘の内、宗教に屬する部分は新らしい。新教の僧侶は未だ社會的に優越でもなく、特權を確保する程強力でもなかつた。且つ重に平民から力を付けられ、其の個人主義は「中流階級」である。故にそれは商人と結合して、彼等と地主との階級争闘の一要素となつた。従つて多數の聯合は地主々義と更に古い教會主義との間にあり、而して多數の内的集團の争闘は此の結合と國民的王国との間に存する。

それは Henry 八世の下に於ける國家主義の確立、新教の優越に終る。(但し Mary 及び Stuarts の治下に於ける短い復活を除く。)

今や終に商人と地主との階級争闘は充分に緊張した。(とは云へ暴力はない。)發見の航海は新しい未曾有の機會を開いた。商業冒險家は勢力家となつた。然し昔の軍人と同じやうに彼等は充分な社會的確認を要求した。彼等は妥協した。大商人は貴族たるを許され、而して貴族は結婚に依つて(若しくは他の方法に依つて)富の收入を獲得した。かくて資本家階級が作られた。斯して近世史は正午となる。資本主義は發明と革命的の産業とを開發した。賃銀獲得の勞働者階級は解放された奴隷に由來し、「階級意識」を有つ順番となり、Karl Marx は劃時期的の發見——階級争闘は歴史を作る——をなした。

(未完)

### 中世の紀年法大意(上)

問 崎 万 里

歐洲の中世期に於ける諸般の歴史的研究或は記述を爲さんとする初學者が、先づ第一に心得置くべきは中世の紀年法に關する知識であらう。一九一八年以降「歴史研究者の友」(Helps for Students of History)と題して「キリスト教知識普及會」によつて刊行せられて居る叢書中に、幸ひ Reginald L. Poole, M. A., LL. D., Litt. D.: Medieval Reckonings of Time, 1918. がある。本書は勿論通俗を旨とする片々たる小冊子に過ぎないけれども、史學の根本的素養を缺ける人々には、却つて便利であらうかと思はれるによつて、爰に紹介の勞をとる。

△時の單位 歐洲の中世期に於ける時の數へ方を極く簡單に述べようとするのが本篇の目的である。それ故、爰ではユリウス曆即ち舊曆法について述べる丈けであつて、新曆法即ち羅馬法王グレゴリウス第十三世によつて、一八五二年に採用せられた改曆には關係しない。(註)吾人

は又埃及の Ptolemaic system の支配を受けて居る。即ち太陽と諸惑星が地球の周圍を廻轉するのであると假定せるこの信仰は深く日常言語のうち含蓄されてゐるので、その假定の上に築かれた叙述を當然と心得て怪むものがない位である。又爰でいふ日と年とは普通の觀測に基いた時の區分をさすのであつて、天文學者の算定になつた他の時の單位をいふのではない。爰では又數字を細かい所まで精密に擧げることがを必要としない、たゞ太陽曆年は之を假りに三六五日四分の一とすればよいので、必しも三六五日と五時間四十八分四十六秒など、言はなくともよい。

註 シーザーの曆を制定したのは西曆紀元前四十六年一月一日のことである。其後曆官が規則を間違つて、アウグスタスの時に之を直してから其儘千五百八十二年まで行はれた。最初シーザーは春分が三月二十五日にある様にしたのに、千五百八十二年には三月十一日に太陽が春分